



診断推論のバックステージ ワンランクアップのための診断推論教育 11の要点 Teaching Clinical Reasoning 志水太郎 訳

●A5変 頁280 2016年11月
定価：本体4,600円＋税
[ISBN978-4-89592-868-7]MEDSI刊

臨床推論の能力は、医師の診断能力の高さに関連するに違いない。患者さんから①病歴を聞き②鑑別疾患を絞り③身体所見を取り④検査所見にて診断を確定するという作業は、おそらく20世紀になり行われてきたと思われる。近年、画像、採血などの検査の役割が強力になり、④>③で診断するという傾向が強まるのも時代の流れであろう。一方、診断エラーは、患者予後を悪くする。それを防ぐには①、②の精度を上げることであろう。しかし、このトレーニングの方法論は、実際には不確実なものばかりである。それで、私はこのような方法論を学んでも深い臨床推論能力を獲得することはできないと思っていた。出会った疾患を深く学び、機会を得ては更に学ぶという反復が、深い知識と見識を生む。これには10年1万時間という歳月が必要だということを、他の職業の例からも実感している。多くの医師はこの歳月を経て、自分の医師としての能力を実感しているのではなかろうか。

Lawrence Tierneyの一番弟子とされるGurpreet Dhaliwal医師を、臨床推論能力を持った教育者のエキスパートとして私は尊敬している。第8章を担当しているが、上記のような経験だけではエキスパートにはなれないことを語っており、彼なりの方略を示してい

た。私は俄然この本の見方を変えた。

一生懸命目の前のことに従事していても、水平思考の方法論がなければ、行き詰ることがあることをこの本は示している。若い医師を育てるのにどのような方略が良いのかは、未だ誰も答えを持っていない。しかし、他章をよく読んでみると、医学教育に必要な基本的なコンセプトの根拠が何で、現在までに何がわかっていて、何がわかっていないのかを示している。例えば診断のsystem 1とsystem 2という概念にどのような由来があるのかも示されている。学校の教師が生徒の読む教科書とは別に指導要綱を読んでいるように、この本は、若手医師の指導者が、指導要綱として学ぶべき内容だと気付いた。

訳者の志水太郎先生の『診断戦略：診断力向上のためのアートとサイエンス』が導入書だとすると、この本は、さらに詳しく根拠を持って記述した解説書である。臨床の現場の中で少し診療に自信がでてくるのが後期研修医以降の医師であろう。この時期の医師や、後輩を育成する立場になったスタッフ医師が、自らを省みるためのヒントを与えてくれるだろう。読者が増えることで、わが国の臨床教育の質が上がっていることが期待される内容である。